

あそぶ・まなぶ・語る

周防大島町総合体育館陸上競技場 / 日本ハワイ移民資料館
八幡生涯学習のむら / 宮本常一記念館

第45号
2024年2月

周防大島に
強豪校集う！

「サッカーの島」 盛り上がる！！

町館 大島 総合 防合 周総

「第9回周防大島町長杯 サザン・セト大島 高校サッカーフェスティバル」が1月6日～8日の3日間にわたって開催されました。

決勝戦は、九州国際大学付属高等学校（福岡県）対広島県瀬戸内高等学校（広島県）。その結果、九州国際大学付属高校が瀬戸内高校とのハイレベルな優勝決定戦を制し、見事優勝を果たしました。新チーム始動後すぐとは思えない強靱なフィジカルと技術で、予選を失点0で勝ち上がり、第9回目にして初の全試合無失点、複数優勝回数（2回）を達成しました。



【写真上＝九州国際大学付属高等学校】



中国、九州から8校が集まり、激しい戦いが繰り広げられました。7・8日は長浦スポーツ海浜スクエアと周防大島町陸上競技場でリーグ戦が行われ、最終日は両会場に分かれて順位決定戦が行われました。

皆様ご観覧とご声援をありがとうございました。今年も他県遠方より周防大島町にお集まりいただき、素晴らしいパフォーマンスを見せてくれた各校選手に深く感謝します。（周防大島町総合体育館・陸上競技場）

しめ飾り作り体験



生涯 学習の 八幡

八幡生涯学習のむらで開催しているサロンでしめ飾り作りを行いました。しめ飾りには地方によって様々な形がありま

す。今回は久賀の旧伝承文化同好会が継承してきた形のしめ飾りの作り方を指導いただきました。

まず、お供物作りです。10センチ四方の白い紙を折り、その中に小さく切った昆布とお米を3粒くらい入れます。海のものとの山のものを供えるという意味があるのだそうです。それからいよいよワラでナワを作るナワないという作業にとりかかります。しめ飾り用のナワは日常生活で使うナワとは逆方向になう、左ナワという作り方です。難しい作業ですが若い時にやったことがあるといいう方もいて、和気あいあいと楽しく作ることができました。最後に大小二本のナワをそれぞれ輪にして重ね、ウラジロ、ユズリハ、お供物、スタイダイを取り付けて完成させることができました。手作りのしめ飾りで迎えるお正月はひとときわらしみなものになりました。（古賀瑞枝）

ハワイの 米事情

日本ハワイ
移民資料館



【ハワイの米作り（ハワイ移民資料館仁保島村蔵）】

近年、町内の小・中学校が、総合的な学習授業、地域学習・社会見学と題して、クラス単位で本資料館を訪れ、ハワイ移民の歴史について学習しています。正味40分間の限られた時間の中で、ビデオ視聴や展示資料から理解を深めてもらうべく説明をしながら、質問の時間を設けていますが、ある児童から「移民した時にハワイでもお米を食べることができたのですか？」と質問が。この質問、ハワイを思い描くときに誰もが

感じる素直な疑問なのかな、と感じました。

そこで今回は、ハワイの米事情について皆さんにご紹介をしたいと思います。

とはいえ、ハワイの米作りについて記した書籍はほとんど無く、探しあぐねていたところ、広島のハワイ移民資料館仁保島村館の館報『にほしま』第23号（令和2年6月）の次のような文章にたどり着きました。

1885（明治18）年から始まったわが国とハワイ王国との移民契約。

渡航費用・住居・治療費・炊事用薪炭無料の他に、3年間人頭税を免除するという好条件であった。中でも白米は5セント以下で支給、3度の飯に白米が腹いっぱい食べられるとあつて移民たちはたとえようもなく喜んだ。

やがて生活が落ち着くにつれて、支給される米はパサパサ冷めたら不味いと不満が出てきた。ならば日本の米を作ろうと水田栽培に乗り出したものの、栽培条件の良いところは全て先行住民の支那人が占め、その上組合を作って団結。日本人が参入

する余地はなかった。

それでも旨い米が食べたい、その一心から残された悪条件の土地を水田に改良、時間をかけて徐々に耕作面積を増やしていった。努力は実り、ついには支那人を抜いて日本人が米作の中心に躍り出た。

ところが将来は前途洋々と見えた米作りは、アメリカ本土カリフォルニア米という手強い相手が現れて

カリフォルニアで大型機械農業によつてうるち米が大量生産されるよ



【日本と変わらぬ水田風景（ハワイ移民資料館仁保島村蔵）】

うになると、ハワイの米は、価格的に太刀打ちできなくなり、自然とそれまでの手作りによる日本人のコメ農家が消滅していきました。現在、ハワイに水田は存在しませんが、カウアイ島ハナレーバレーにあるハラゲチライスミル（精米工場）博物館では見る事が出来るようです。

（木元眞琴）

むかっく 向津具の あまし 海女士の 思い出写真

久賀歴史民俗資料館
日本ハワイ移民資料館
共同調査

それはSNSに投稿された一枚の写真がきっかけでした。写真には「周防大島」「戸田（へた）」「出稼ぎ」「向津具」のハッシュタグ。なんと、70年前に向津具（現長門市）の人が周防大島の戸田に出稼ぎに来ていたときの写真のようです。カメラやフィルムが高価だった時代、写真を撮るのは特別なときで地元の人にげない風景はなかなか残っていません。しかし、地元では日常の風景も地域外の人にとっては非日常で、写真を残

す価値はあります。外から見た周防大島のお話を聞くことができる機会です。さっそく長門市教育委員会を通じて写真を投稿された向津具集落支援員の方へ連絡をとっていただき、月に一回開かれている茶話会で写真の所蔵者に直接お話を聞かせていただくことになりました。

所蔵者は昭和7年生まれで、生まれも育ちも向津具大浦（おうら）の方。18、19歳頃から海女として働き、20歳の時に戸田へ出稼ぎに来たそうです。親方の船に船頭さんが2人、海女6、7人が乗っていました。戸田では広い個人宅に泊り、海を借りて漁をしました。親方が地元の人と交渉して借りていたのかもしれない。採ったのは赤ウニで目方を計って歩合で月給にプラスされました。戸田には長い波止があつて、2時から3時頃には海からあがつてウニを板につけるオリタテ（板つけ）をしました。ウニは船頭さんが小松港へ持っていく、そこから下関へ出荷していたそうです。

ところで、この写真は現在の戸田のどのあたりでしょう？ 70年も前に戸田の海で仕事をしていた向津具

の海女を覚えている方がいらつしやるでしょうか。戸田は大島地区。すぐに大島地区に詳しい日本ハワイ移民資料館（以下、移民資料館）に連絡をとりました。移民資料館の木元



【写真＝昭和 27(1952) 年撮影 個人蔵】

「ああ、これは長門の船じゃ」
サロンの参加者さんは写真を一目見ると声をあげられました。船の形、特に船縁の形が長門の船の特徴なのだそうです。

「70年前、戸田は沖浦村で一番にぎわっていた。村の中心で、郵便局も戸田にあった。農業が中心で、漁業は遊漁くらい。潜つての漁はやっていなかったねえ。海女さんたちは下関からきたと聞いていた。ウニを採っていた、ほかのものは採らなかった。きれいに洗って、小さなカンに入れたり、板につけたり、いいのと悪いのを分けたりしていた。10人くらいきていたかね。多い時は20人くらい来ていたんじゃないだろうか。着物を来て海へ出ていた。この写真の通りじゃ。仕事するばかりで特に話をするのはなかったけどねえ。出稼ぎには島根から山子（やまこ：林業労働者）の人も来よかったよ。島根は冬になる

と雪が降って山仕事ができなくなるからね。

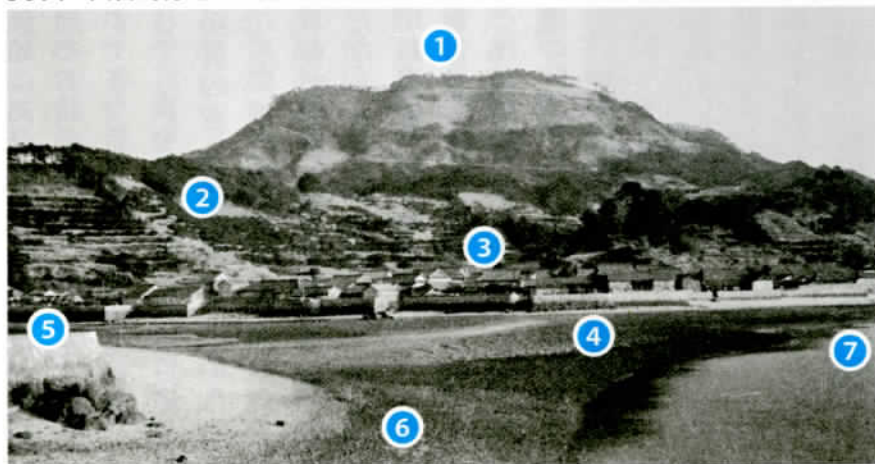
この写真の左から二軒目、字が書いてある大きな建物は「木村回漕店」。柳井へ行く船の切符やタバコを売っていた。平郡島から大島各地へ行く人や安下庄から来て柳井へ行く人が利用した。その右は油を搾る店、その右は木村回漕店から引き継いで柳井へ行く船を出していた。前の海に見えるのはその店の伝馬船じゃなかろうか――

たまたまお店に入ってから見た方も写真を見て「お！ 木村回漕店！ なつかしいね。こんな写真があったんじゃないやね」と驚かれていました。

出稼ぎや移民の島として知られる周防大島ですが、一枚の写真から他所からも様々な人が出稼ぎに来ていたことがわかりました。聞かせていただいたお話も町の歴史を伝える貴重な証言です。移民資料館と歴史民俗資料館の連携で、周防大島の歴史を記録することができました。なによりも貴重な写真を快く提供してくださった所蔵者様、向津具集落支援員の方々、長門市教育委員会のご協力に感謝いたします。（古賀瑞枝）

館長があちこち問い合わせ、奔走されること数週間。80代で昔の事をよく覚えていらつしやる方が見つかったというのです！ 沖浦のサロンにお話を聞きにうかがうと――

【写真＝真宮島付近から見た長崎 昭和32(1957)年3月19日 宮本常一撮影】



- ① 白木山。頂上まで登ると、伊予灘には石炭を積んで北九州から大阪に向かう船が見えた。斜面を筋状に横走するのは、昭和16年に高射砲隊の陣地をおくことになってつくった道路。それ以前は人一人がやっと通れるくらいの山道だった。また養蚕が盛んだった頃は、中腹に桑畑があり、クワカゴを背負って通った。山には松が多く、戦前はその松を伐って家の建替えを行った。
- ② 段畑には下肥を担いで上がった。化学肥料が普及する前は、川にはハゼやウナギ、ホタルなどの生きものが多かった。川はまた洗濯場でもあった。
- ③ 長崎の集落。当時は100軒ほどの家があった。長崎には地下水が豊富なところがあり、井戸を掘っていると水が噴出し、慌てて逃げたという話もある。地下の水脈によって、海岸には貝が多数生息できたのではないかと考えられている。
- ④ 海岸の家は御影石で石垣をついて海と接していた。海が荒れると屋根の上まで波しぶきがかかったが、人々は自然と妥協して生活しており、あまり文句を言わなかった。そうしたマイナス面もあったが、海辺の夏は涼しく、晚になると石垣の上に飯台を置いて涼みながらお粥を食べることができた。食事中に父と息子が喧嘩し、息子が石垣から海に飛び込んでそのまま我島まで泳いだという話もある。今の東和小学校の前にはミカンの集荷場があり、満潮時にはそこに船をつけ、ミカンを運んだ。海はまた、子どもの遊び場でもあった。
- ⑤ 真宮島の波止。明治32年頃に地元の寄付によってできた。この波止には満潮になるとヤハンドー(スズメダイ)やギザミ(ペラ)が集まり、子どもが釣っていた。
- ⑥ 真宮島には、沖側にあるオキシングウと陸側にあるカチシングウの二島があり、潮が引くとカチシングウを経てオキシングウまで歩いて渡れた。これをシングウノミチといった。付近は潮流が速く、潮が引き切らない間は、親が子を肩車して渡った。カチシングウにはここで溺死した子どもの墓がある。シングウノミチの両側には小石原のイソが出た。このイソにはアサリが多く、漁業権が確立される前は自由に掘ることができた。シャコも多く、沖家室島の漁師が釣餌として買いに来ていた。長崎のシャコを餌にすると、大きなタイが釣れると言われた。
- ⑦ この右側(西側)、現在総合体育館のあるところから下田の生島付近まではカタと呼ぶ肌理の細かな干潟が100メートルも出た。「カタをたたく」といって、杖をつくように鍬の刃の根元付近でカタを叩くと、砂に潜っている貝が驚き、貝の目(水管による穴)がはっきりする。その際、カタニギリ(ギンポー)が飛び出してくることもあった。また、「カタをすく」といって、後ずさりしながら平鍬を引きずると、3～4センチの深さにいるバカガイ(ヒトクイ)にカチッとあたる。その音を聞いて手で貝を掘った。マテガイやハジョー(ズングリアゲマキ)は逃げる道をつくっており、潜るのがはやい。バカガイは浅いところにいて掘りやすいが、食べるには身が小さかった。

企画展 写真でみる 周防大島東部の 生活誌

宮本常一記念館

宮本常一の写真には、地域に眠る記憶を呼び覚まし、ふるさとの魅力の発見につながるものが少なくありません。特に周防大島では、昭和30年代前半から50年代後半にかけて

5000枚を超える写真を撮っており、当時の集落景観や衣食住、生業、交通状態などを知る(あるいは思い出す)ことができる格好の材料です。そこで、今回の企画展では、宮本が東和地区で撮影した写真を窓口にして、周防大島東部の暮らしの移り変わりを紹介します。展示室には写真に解説文を付けたパネルを並べ、

絵巻物風に当時の暮らしを具体的に「よむ」ことができるようにします。左にはその予告編として、地元の方からうかがった話をもとに宮本の故郷である長崎の写真を紹介してみました。皆様のご来館をお待ちしております。(板垣優河)

【期間】令和6年3月23日(土)

～5月12日(日)

【問合せ】

宮本常一記念館

0820・78・2514

【場所】

※水曜ほか休館日を除く

【観覧料】

宮本常一記念館の展示室

通常の入館料でご覧いただけます。

一般(高校生以上) 300円

小中学生 150円

※町内の小中学生は無料